

母の 693 ひろば

doshinsha / haha no hiroba



祝 第58・59回高橋五山賞各賞受賞 2

耳で聞く小さなおはなし⑩「ホンのちよっぴり」／村中李衣、石川えりこ 3

幼年文学の魅力／土居安子 4

わたしの原風景②⑥／高家博成 6

おさんぽ自然観察⑨／いしもりよしひこ 7

イラスト／アヤ井アキコ

1年ぶりの紙芝居実演

キム・ファン

紙芝居を演じるたのしみは、ずばり、子どもたちの反応だ。緊迫した場面では子どもたちの表情がこわばる。そのあとに見せてくれる、安堵の顔や笑顔、歓声がたまらない。それを見たくて聞きたくて演じている。

こっちだって、緊張でこわばっているんだ。うけるかな？ 笑顔になってくれるかな？ 歓声はあがるかな？ はじめる前は、はらはらどきどきだ。そして反応がよいと安堵し、心の中でぱっと笑顔になって、声はださないけれど歓声をあげる。演じる自分と子どもたちの反応が一体になってこそ、紙芝居なのである。

ところがコロナ禍のあおりを受け、なかなか実演がかなわなかった。苦肉の策として、オンライン実演や動画配信もしてみたが、子どもたちの反応が直に伝わらない。やはり紙芝居は、「生ライブ」でないとしたのしくないのだ。

昨年11月、じつに1年ぶりに子どもたちの前で紙芝居を実演した。この日、演じたのは『アオバズクのおうちさがし』（おおたぐろまり・絵）。初お披露目を予定していたイベントがつぎつぎとコロナで中止となり、ついには刊行から1年4か月が過ぎても、1度も子どもたちの前で演じることがかなわなかった作品だ。はたして反応は…？ おそろおそろ演じはじめた。

この作品のあらすじはこうだ。アオバズクが木の穴のおうちを探そうとするが、ミツバチがいたり、ムササビが先に使っていたりして、なかなか見つからない。それどころか、おそろしいテンとたたかうことになる。

話が進むにつれて、子どもたちの表情がこわばっていくのがわかった。

「アオバズクは、となりのまちで木の穴のおうちを一生懸命探しました。そして——」

絵をぬいて、声を張った。「みて、みて！ わたしいいおうち見つけたの！」得意げに巣箱から顔をだしているアオバズクを見たとき、子どもたちの表情が一気に明るい笑顔になった。「うわー」という歓声もあがった。

これだっ！ この反応が見たかった！ 聞きたかった！ ぼくもほほえみ、思わず心の中で、「よしっ！」と叫んでいた。紙芝居をつくってきて、本当によかったと思える瞬間だ。

実演したくてもできない日々を経験したことで、ますます紙芝居が愛おしくなった。

（児童文学作家・絵本作家）

●アーサー・ピナードさん

嫌いな日本語といえは「ペーパーレス」。英語の paperless も嫌いだ。先人たちの繋がりや断ち切り、ぼくらを記憶喪失の民にはめるストラテジーに違いない。では対極にあるものは？「紙芝居」だと思つた。先人と繋がるメディアとして多くの抵抗力の源になっている。中でも高橋五山の作品は、自分が目指す文学の最高峰といえる。丸木俊と位里の絵から生まれたこの『ちっちゃいこえ』が人々に伝わると嬉しい。「ペーパーフル時代」を作りたい、ぼくの第一歩でもある。

●丸木ひさ子さん

五山賞特別賞受賞、大変うれしく思います。長い時間をかけてこれはどうか、これはどうかと切つて貼つて伸ばして「原爆の図」から紙芝居の新たな絵が生まれていった。これで許可がおりるのかとアーサーさんも心配されたそうです。許可を出すのは位里と俊。そこで私は考えた。命が一番大事なのだ。細胞がズンズンと音をたてていることが生。死んだら音はない。アーサーさんと二人は同じ考えと思う。だから代わって許可を出す。原爆の図を基に翔べと思う。



第58回

高橋五山賞特別賞

『ちっちゃいこえ』

アーサー・ピナード／脚本

丸木俊・丸木位里／絵

(「原爆の図」より)

16 場面

定価 2970 円

(本体 2700 円＋税 10%)



祝

第 58・59 回 高橋五山賞各賞 受賞

1 年間に出版された紙芝居のうち、もっとも優れた作品に贈られる「高橋五山賞」。昨年延期となったため、第 58・59 回（2019・2020 年度）の 2 年分の受賞作が決まり、高橋五山賞特別賞に『ちっちゃいこえ』、高橋五山賞に『三月十日のやくそく』が選ばれました。受賞者の方々に言葉を寄せていただきました。

第59回

高橋五山賞

『三月十日のやくそく』

早乙女勝元／脚本

伊藤秀男／絵

12 場面

定価 2090 円

(本体 1900 円＋税 10%)



撮影・照屋真治



●早乙女勝元さん

小さな子どもたちに、わずか十二枚で「戦争」のことを伝える。これまで大変長らく、語り継ぎをしてきた私にとって、今回の紙芝居ほど難しい挑戦はありませんでした。伊藤秀男さんの絵筆により、幼い私と友だちが、紙芝居のなかで生き生きと動きだすのを見たとき、ああ、本当によかったと、胸をなでおろしました。同時に、子どもたちは守られねばならなかったのだと、つくよ感じています。

今年九十になる私の、新しい一歩へのご褒美と受けとめ、深く感謝いたします。

●伊藤秀男さん

この仕事にとりかかる時、童心社の担当の方と早乙女先生のお宅へお伺いした。そして、娘さんの愛さんをお話を三月十日に関連したいろいろなお話を聞き、映像も見せていただいた。それから、紙芝居のラストシーンとなる、言問橋へ向かった。僕は、先ほどの先生のお話のとおり、未だに硝煙や脂の跡が生々しく残る石組みの橋柱にもたれて、橋をゆく人々や隅田川や、むこうに見えるスカイツリーをスケッチしたのだった。『東京大空襲』（岩波新書）のあの頁、この頁が思い起こされた。

耳で聞く小さなおはなし⑮

「ホンのちょっぴり」

文・村中李衣 絵・石川えりこ

ね、どきなさい

我が家の畑の大根を両手にぶらさげて、朝もやの中を帰っていくサルに遭遇。「あちゃっ！ やつてくれたな」と石の一つも投げたくなるが、まてまて、こいつにも家族がいるのかも……と、思い直せるのは、たぶん、原田君のことがあったからだ。

小学校の修学旅行先は宮崎の高崎山だった。動物全般が苦手な私は、動き回る毛ボールみたいなサルの群れに氣後れして、うしろへうしろへ下がっていった。元氣なこうちゃん、やつちゃんたちは、柵から身を乗り出すようにして「お〜いお〜い」とはしゃいでいる。ぎろりとこつちをみやるサルたち。私は、さらにうしろへうしろへ。氣づいたら、集団の最後尾。そして隣にもう一人、原田君がちょこんと立っていた。六年生の中で一番おとなしい男子だ。

そのうち、ぽつり、ぽつつ、と雨粒が落ちてきた。レインコート出さなくちゃと思ったその時、リュックがグイッとうしろに引つ張られた。

(サ、サ、サル)

声も出ない衝撃。

次の瞬間サルは私のリュックから原田君の縁のリュックの方へ飛び移った。みんなの悲鳴。先生の怒号。その中で、全員が確かに聞いた。原田君が背中サルの縁に繰り返し丁寧に話しかける声。

「どきなさい」「ね、どきなさい」穏やかなその語り掛けがよほど心地よかったのか、サルは係員に引きはがされるまでずっと原田君の背中にいた。それを見たこうちゃんが「原田、スゲーな」と、つぶやいた。

『あんちゃん』に登場する（おいらのあんちゃん）は、からだがかくて腕相撲も学校一。でも、あんちゃんのほ



あんちゃん
高部晴市・作

んとつの強さは、目が見えなくなっていく病気の不安の中でも「ふーっ」とひとつ息を吐いて自分を取り戻していたこと。

幼年文学の魅力

土居安子

● **どい やすこ** ● 児童文学研究者。一般財団法人大阪国際児童文学振興財団理事・総括専門員。研究活動のほか、教員・司書・ボランティアなどに対し、読書活動に関わる研修や国内外の児童文学作家の講演会、シンポジウムの企画などを行っている。共編著に『子どもの本100問100答』（創元社）『明日の平和をさがす本』（岩崎書店）『ひとりでよめたよ！ 幼年文学おすすめブックガイド200』（評論社）がある。



イラスト／アヤ井アキコ

● 絵本と幼年文学 ●

絵本に「めの まえには みたこともない「ごちそうが ならんでいました」という文があったとする。絵には、見ただけで「おいしそう!」と考える「ごちそうがいっぱい並んでいるので、それを一つずつ確認しながら、「おいしそう」を感じる。

ところが、文字だけで書かれた文学では、この表現では、イメージがわからない。

「めの まえには、かりかりに やいたおにくに、あまい においのする むらさきいろの ソースが かかったもの、……ほしの かたちの にじいろの アイスクリームが ありました。」など、具体的な表現によって、「おいしそう」を感じる。

二つは異なるメディアであるから当然である。子どもたちが文学の楽しさを知るためには、絵本から一足飛びに児童文

学作品を体験するには困難が予想され、その橋渡しの幼年文学を体験することが考えられる。言葉だけでなくにも豊かな物語が紡がれるのかと感じられる体験によって、言葉への信頼感がはぐくまれ、将来にわたって文学を楽しむことができる第一歩となる。

● 読んでもらう本、自分で読む本 ●

とはいえ、幼年期（就学前から小学三年生くらいまでとする）の多くの子どもは、文字を読むことに多大なエネルギーを使う。

そこで、まずは、読んでもらう体験をたくさんすることから始めたい。幼年文学作品の中には、一人で読むには表記などが難しすぎるが、読んでもらえれば楽しめる作品も多い。特に就学前は読んでもらうことで、言葉でイメージを膨らませる楽しさをたっぷり味わい、文字を解読することに煩わされずに、物語を体験することができると。

読んでもらっているうちに、自分で読みたいという気持ちが芽生えてくる。すると、読んでもらった同じ作品を自分で読み始めるようになる。大好きな話を自分のペースで読めたという達成感があつた後に、知らない物語を自分で読み始める。とはいっても、読んでもらう時期

は終わりではなく、作品の難易度によって読んでもらった方が楽しめる本と自分で読んで楽しめる本を並行して楽しみ、読書が個人的な営みとなったとき、初めて自分の好きな物語を自分で密かに楽しみたいと思うようになる。

● 押し絵の魅力 ●

多くの幼年文学作品には、押し絵がある。読者は絵によって登場人物をイメージしたり作品のできごとを理解することができる。そういう意味では、絵本と近い関係にあり、その境界線上にある作品もある。特に最近の幼年文学は、ページのめくりなどにも配慮して文と絵が組み合わされており、絵の魅力も欠かせない。

● 幼年期ならではの ●

幼年文学を選ぶ時に見落してはいけないのが、幼年期ならではの物語の受け取り方である。幼年期の子どもは、知らない言葉や事柄が身の周りに氾濫している中で、限られた知識でそれらを「理解」しようと、想像をふくらませる。人も物も自分との関係の中で理解しようとするので、物の擬人化は当然のことであるし、物語で語られる空想世界も自分の生きている世界と地続きのものとして感じられる。時計が刻む時とは異なる時の感覚で

生きている。そして、その中には、私たち大人が失ってしまった感覚も多くある。

このような感覚で生きている子どもには、大人の考え方を押し付けるのではなく、そのような物の見方、感じ方を広げ、深めてくれるような幼年文学が必要だと思う。子どもたちの今の生き方、考え方を言葉で表現し、肯定しつつ、大人の世界を垣間見せてくれる作品こそを幼年文学作品として子どもに手渡したいと思う。

このような作品を書ける作家は稀有である。それは、幼年期の子どもの感覚を持ち続けていることが必要だと思うからである。

●幼年文学の条件●

幼年文学を選ぶにあたって、子どもが理解できることは当然ながらもっとも重要である。そういう意味では、すっきりした冒頭と結末、繰り返し、歌やオノマトペなどを使って耳から聞いて楽しめること、五感に訴えること、主に会話や登場人物の行動でストーリーが展開すること、わかりやすい構成、既知と未知のバランスが配慮されていることなどの条件が考えられる。

●幼年文学のジャンル●

幼年文学のジャンルについて、童心社

「だいすき童話」のシリーズを例に考えてみたい。

まずは、幼年文学ならではの「もの言う動物」などが登場する物語が挙げられる。これは昔話と同様に、擬人化された動物やモノたちが人間のようにふるまい、人間と自然に会話をする作品である。『あらいくまのせんたくもの』（大久保雨咲作 相野谷由起絵）は、人間のおばあさんに、あらいくまの子どもが「かなシミ」のついたハンカチを洗って欲しいと依頼し、おばあさんがあらいくまに助言をする。『まえばちゃん』（かわしまえつこ作 いくつみ絵）は、へらへらになった乳歯のまえばちゃんが主人公の相談相手になる。

子どもたちの日常のとまどいを描いた『二年二組のたからばこ』（山本悦子作 佐藤真紀子絵）や『はるかちゃんが、手をあげた』（服部千春作 さとうあや絵）はリアリズム小説につながる作品群である。いずれも子どもたちの心のつまずきが丁寧に表現されており、いろいろな子どもがいることが読者に伝わる。

「めいたんていサムくん」シリーズ（那須正幹作 はたこうしろう絵）は、推理小説の第一歩といえる。子どもたちが身近な謎を解決していく道筋が丁寧にたどられており、その中でサムくんたちは周

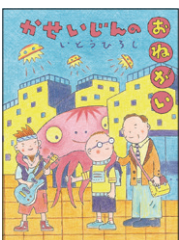
りの人と関係を結び、社会の出来事について気付いていく。

空想的な作品としては『かせいじんのおねがい』（いくつひろし作）が、ナンセンス作品としては『タコのターくんうみをでる』（内田麟太郎作 井上コトリ絵）が挙げられる。前者は火星人だとな乗るおじさんに出会う少年の物語で、SF的な要素をもっている。後者は、タコのターくんがライオンのラオくんに会いに陸地に出かけていく物語で、道中のハプニングも楽しい。

●おわりに●

より多くの幼年文学作品の例については、筆者が所属する大阪国際児童文学振興財団（I-CLO）編『ひとりよめたよ！幼年文学おすすめブックガイド200』（評論社）を参照いただきたい。幼年文学というジャンルは、読者層が限られ、限られた語彙で豊かな物語を紡ぐ難しさがあるため、長く読み継がれるであろう作品が次々と出版されるジャンルではない。しかしながら、とても大切なジャンルであり、出版され続けてほしい。そして、多くの親子が幼年文学を読んで楽しんでほしいと思う。

「だいすき絵童話」シリーズ



わたしの原風景

26

高家博成

昆虫学者、
絵本作家



イラスト／平澤朋子

私が生まれたのは、一九四一年。太平洋戦争のはじまった年である。京都の北の端、丹後の口大野村で生まれた。後に数村が合併して大宮町となり、近年はさらに合併が進み、京丹後市となった。

生き物に目覚めたのは小学生の頃であった。当時から将来は生き物関係の職業に就きたいと思っていた。田舎のことだから、家から一歩外に出ると、もう自然の真ん中である。学校を終えるとすぐ近所の友たちと野山に出て遊んだ。

村を通る大きな川（竹野川）は、格好の遊び場だった。アユやヤマメはめったに釣れないが、フナやハエ、ギギなどが釣れた。

私たちはなにも道具を持っていなかった。そのあたりの笹を切って竿にして、ミミズを捕まえて餌にし、魚を釣った。自然のなかにあるものが、私たちの道具である。そんな様子だから、手足はいつも虫刺されやケガだらけだった。流れの中に入って立派な竿を手に毛針で釣りをしている大人の姿を見かけると、うらやましく思ったものだ。

初夏の夜の川縁では、ホタル狩りをする子どもたちの声が、あちこちから聞こえてきた。あたりが暗くなると、私も外に飛び出していった。竹野川ではゲンジボタルが、田んぼのそばにはハイケボタルがいるのだ。

ナタネの穂殻を竹の棒の先につけ、箒のようなものを作り、それでホタルを捕まえる。手の中で点滅する光は、何とも言えない美しさがあった。夢中になって繁みに入ると、土の上で、またたきもせず、光りっぱなしのものがある。ホタルの幼虫が光っているのだ。これが繁みに潜んでいるママシの目に見えて、しょっちゅう驚かされたことを覚えている。

後に、昆虫園に務め、生涯、大好きな虫や生き物を相手に仕事をするようになった。高校卒業の十八歳まで過ごした丹後の自然が、私の原体験の場であり、原風景である。

おさんぽ自然観察 ⑨

いしもり
よしひこ

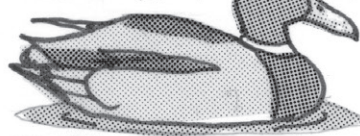
しゃくじ いがわ
冬、石神井川に
たくさんのカモが
北方から冬を越す
ため、渡ってきます。
カルガモやサギなど
1年中見られる
水辺の鳥もいます。

でも、以前はたくさん来ていた
ユリカモメが今冬は見られ
ません。継続して見ていると
そういう変化もわかります。

③ 私の見ている辺りに冬にいる水辺の鳥たち マガモ



おでこから頭への太い
ラインが目印。



緑の頭に黄色いくちばし。
この辺りには多くないです。



以前はいちばんたくさん
いたのに、現在は少数派。



キンコロ
ビジロ

今、いちばんたくさん
います。潜水する小型の
カモです。



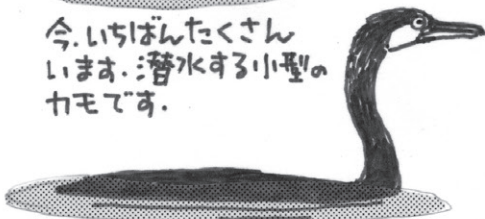
カルガモ

1年中いて、春にはヒナを連れて
いるところを見せてくれます。



コガモ

目のまわりの
緑がカワイイ。



カワウ 泳いでいる時、
カモよりずっと体が沈んでいます。



リョオバン

頭を前後にクイッククイック
とふって泳ぎます。
カモの仲間ではなく
ツル目クイナ科。



コサギ
1年中います。

足指が黄色



カワセミ
背中が本当にキレイ！
1年中います。



アサギ

たまに見えます。
すごい存在感。



遊歩道にあるモニュメント！

ふた昔前にあった
「矢がモ馬強力」の
記念石碑です。

背中にボウガンの矢がさったままの
オナガガモが、この辺りと上野公園の
不忍池とを往復していたのでした。

☞ 指さして「コガモ!」「コサギ」と言うと「え、あの鳥まだ子どもなんですか?」という人がいます。「そういう種名です!」

いしもりよしひこ（石森愛彦）／猫と虫と音楽が大好きなイラストレーター。著書に「うちの近所のいきものたち」「昆虫って、どんなの?」（ハッピーオウル社）、共著に「ちいさないきものずかん」シリーズ（童心社）、『かなへび』（福音館書店）、『素数ゼミの謎』（文藝春秋）などがある。

2月の新刊図書！

読者の声

松谷みよ子あかちゃんの本
おさじさん

松谷みよ子／ぶん 東光寺啓／え
定価770円（本体700円＋税10％）



五か月の息子に読みかきをしていました。ちょうど離乳食を始めた時期に重なり、おさじさんを読んで実体験と重ねてほしいなと思いつく読んでいます。もぐもぐと口を動かしたりする私の顔を見て、とても笑顔になってくれるので一緒に読んでいて嬉しくなります。おさじさんと言える日がいまから楽しみです！

（石川県 K・I 三歳）

童心社のおはなしえほん
まいごのモリーとわにのかばん

こまつのぶひさ／文
はたこうしろう／絵

定価1430円（本体1300円＋税10％）



ひつじのモリーは、おでかけするのがだいすき。どこへでもひとりでおでかけできるのです。でも、だいたいまいごになるのです。

むしのたまごシリーズ
**かぶとむしのぶんぶんちゃん
うまれたよ！**

ねもとまゆみ／作 たけがみたえ／絵
須田研司／監修
定価1430円（本体1300円＋税10％）



三歳の息子が自分で選んだので、購入しました。図鑑でさっくりとしか見たことなかった「かぶとむし」が幼虫から大人になる過程」を分かりやすく知ることができて良かったです。

（北海道 M・H 三歳）

単行本図書
みんなのためいき図鑑

村上しんこ／作 中田いづみ／絵
定価1320円（本体1200円＋税10％）



「〇〇図鑑」という、この発想がとてもすばらしいです。小学生のこまやかな気持ちの変化が表現されたとてもよい作品だと思いました。ためいきこそぞうが、本音を言ってくれる。大人になってもそんなことを期待したいと思うことが多くて……ためいきの数だけ希望があると思いたい今日この頃です。

（長崎県 K・Y 六歳）

祝

『こくん』が、第7回JBBY賞（バリアフリー図書の部門）を受賞！



童心社のおはなしえほん

こくん

村中李衣／作 石川えりこ／絵

定価1430円（本体1300円＋税10％）

『こくん』は、つばさ園を舞台として、歩行器を使うわたしと、ともだちの男の子・しゅんくんと心のふれあいを描いた物語です。

障がいに対する理解を深める内容として評価され、JBBY（日本国際児童図書評議会）が選ぶ、第7回JBBY賞（バリアフリー図書の部門）を受賞しました。

あとがき

●コロナ禍で紙芝居を演じるのが難しい状況が続きます。そんな中での五山賞受賞の報は格別嬉しいものでした。A・ピナードさんが7年にわたり「原爆の図」と格闘する中から生まれた『ちっちゃいこえ』。東京大空襲を描く早乙女勝元さんの脚本に全身で向き合った伊藤秀男さんの力強い絵による『三月十日のやくそく』。2つの平和紙芝居、是非ご覧ください。◎

●「ホンのちょっぴり」を連載中の村中李衣さん、石川えりこさんの絵本『こくん』が、JBBY賞を受賞しました。五山賞とあわせて嬉しいニュースが舞い込み、編集部も明るくなりました。3月5日には、お二人による記念講演会「とくべつでない、とくべつなこと」（主催：JBBY）がごさいます。童心社のHPにイベント詳細がありますので、ご覧ください。㊦

2022年2月15日発行（毎月刊）
母のひろば 第693号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：谷口広樹・扇麻子

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円（送料とも）。

